

以上で終わります。

私の話はたいしておもしろくないかもしれませんが、実際のゾウを見ると、うちの当園のゾウ、タンチョウにしても、見るともっとおもしろいので、ぜひ名古屋の東山動物園に皆さんお越しください。ありがとうございました。

○上野吉一

どうもありがとうございました。

今の御発表に質問があればお願いします。どうぞ。

○質問者

東山動物園では、いろいろ飼育係の方々が想像力をたくましくて、いろいろとエンリッチメントのためにせいを出してらっしゃるというのをよく理解できました。

それは何か教科書的なものがあって、そういう何かモデルを横より展開するというような考え方でやってらっしゃるのか。例えばメイソン先生の科学的な、そういう実験結果に基づいて、こういうのをやったらいいんじゃないかみたいなことでやってらっしゃるのかというのが一つの質問で。

もう一つの質問は、午前中に60歳のゾウがかわいそうという話がありましたけど、多分、野毛山動物園だったと思うんですね。私、近くに住んで、いつもやっぱり行動範囲が非常に広い動物が、本当に狭いおりに閉じ込められて、行ったり来たりしてるのを見ると、もう痛々しいんですね。そういう動物園が一方にあるということで、東山動物園みたいにそういう努力をされている、そういうモデルを、ほかの日本の動物園に横より展開すべきだと思うんですけど、その辺の何か動きというか、抵抗勢力みたいなものがあってなかなかそういうことができないのかどうかというのをちょっと教えてほしいんですけど。

○鈴木哲哉

ちょっと難しいですね、私には。

まず、そういったエンリッチメントというのは、教科書的なものは、基本的にはありません。やっぱり理屈的なものは探せば出てくるとは思うんですけども、やっぱり現場で働く者としては、その動物園だとか、その現場だとか、その個体だとか、そういったものに合わせて、やっぱり現場の人間が、よく見てる人間が、やっぱりその都度考えるべきじゃないのかな、考えていった方がより効果的なものができるのかなと思います。ただし、こういったものというのはほとんど横に、ほかのところには広げていきたいと、さっきの質問にもつながりますが、広げていきたいと思っています。

日本の動物園で、ゾウだけの担当者が集まるゾウ会議というものがあるんですね。そういった会議では、こういったことをやっていますよというものを発表しています。そうすると、やっぱりゾウのキーパーは結構長くやってる方が多かったですんですけども、そういう方や次

の若い世代とか、そういった方はすごく食いついてくれて、それいいねだとか、やっぱりそういったことはほとんどやりたいという話はよく聞きます。

ただ、こういった取り組みは個人でできるものではなくて、チームでやらなければならないところがあるんですね、労力的にもなんです。なので、そういった意味では、なかなか個人レベルでは広がってはいるんでしょうけども、組織としてはなかなか広がってきてはいないのかなとは思っています。ただ、これからはどんどん変わっていくと私は思っています。大体これぐらいでいいですか。よろしいですか。

○上野吉一

ほかにございますか。よろしいですか。

それでは、10分休憩をとって、総合討論に入りたいと思います。今、ちょうど10分なので、20分に始めたいと思います。どうもありがとうございました。



○上野吉一

それでは時間になりましたので、総合討論始めたいと思います。

前半の話で、このワークショップはエンリッチメントということになってますけど、エンリッチメントの技術的なことだけではなくて、当然、その目的にもなる動物福祉の問題についてだとか、あるいは動物園ということで、それをどう見せるかという展示的な、決して先ほどの鈴木さんの話、あるいは堀さんの話にもありましたように、エンリッチメント自体は決して展示技法ではないわけですね。それではなくて、動物のために、福祉の手法ではある。だけれども、それは展示手法と不可分のもので、ワンセットになって動物園の中ではやらなければならないということ、展示と密接な関係を持って進められると。あるいは、お客さんにとってはその区別は意識する必要はないわけで、そこで動物が動物らしい振

る舞いを楽しんでもらうということがとても意味のあることですので、そういう意味もといったにもとづいた三つのエンリッチメントに対する見方があるわけですけども。こういった観点からいろいろ御意見とか、皆さん方のお考えとかも含めて議論ができればと思います。

御発表された方、どなたに対してでも構いませんので、質問だったり、あるいは意見ありましたらどんどんお願いします。どうぞ。

○質問者

たびたび申しわけございません。私、最後に鈴木先生がおっしゃった24時間エンリッチメントという言葉、大変感動いたしました。というのは、私、今、日本動物福祉協会の顧問もやっておりますけれど、ウースパとか、世界的に動物園改革が福祉の現場で叫ばれている中で、一番忘れられているのが Behind the scenes という、要するに寝室部分だということですよ。メキシコの例のホッキョクグマが非常に劣悪な寝室の中で、1日じゅう何時間過ごすということの救済活動なんか、結構、福祉関係者の間では取りざたされたりしておりますので、先生がおっしゃっていた24時間のエンリッチメントなんです。

そこで私伺いたいのは、我々動物関係者としては、できる限り、見えないところでもお金をたくさん使ってほしいと思います。ただ、動物園としては、恐らく予算編成や企画の段階で、どこにお金を配分していくかということの問題が、我々が知らないところで御苦労やらバトルとかいろいろあると思うのですが、多分、二つ問題があると思います。

一つは、私は懇意にしておりますズーチェック・カナダのロブ・レイドロウが言っておりました企画や運営、そして予算編成という具体的な設計段階の意思決定機関の中に、動物のために最後まで譲らない委員を1人入れなければいけないと。それがなかなか自分が見てきた欧米を含めて、多くの動物園に見られていなかったと。それは今後、例えば、今、日本はどうかということと、今後それが実現する可能性はあるのかということ。

それからもう一つは、恐らく一番の悪者は、ある意味メディアだと思うんですね。これは犬・猫の世界でもそうなんですけれど、メディアというのは非常にセンセーショナルなものとか、あるいは逆に、とんでもないエンターテインメント性をねらったりしますので、エンリッチメントや行動展示という言葉が若干誤解されるようになったのは、恐らくメディアに大々的に取り上げられました、どこぞやの北の大地の動物園が問題なのではない

かと思っている節もでございます。あそこのシロクマは相変わらずぐるぐる島を回っておりますので。

それから、先ほどジョージア・メーソン先生がおっしゃっていた、周りを全部見られる、360度パノラマというのは非常にストレスだとおっしゃられていましたけれど、御存じのとおり億単位のお金をかけたサル、オラウータンのところは、もうぐるっと回廊式に全部周りを見られるような状態になっていますね。ああいうものを取りざたされて、非常にいいと思われてしまうところで、恐らく堀先生、鈴木先生、上野先生あたりは多少何か御意見をおっしゃっているのか、おっしゃりたいんじゃないかなんかと思っはいるんですが、そういうものというのは、動物園関係者からどこに、メディアとかにきちっと出すすべはあるのか。

これは私、実は動物園関係者で、一般の方がこれだけ集まっているいろんなことを伺える、私にとっては最初のチャンスなんですね。今までは個人的には上野動物園の、例えばもとの中川先生とか、いろんな方に御質問をさせていただいたりはしてきたんですけど、こういうふうなざっくばらんにお話を聞かせていただいて、御意見を伺える場合は、これが私にとっては初めてなんですけれど。

果たして今後、こういうものが可能なのか。動物園関係者と、本当に動物園を改革した方がいいのになんか思っている民間人との間の対話というのは、これからどういう形で進めていけばいいのか。場合によっては、エンリッチメントの予算などは、動物愛護団体がファンドレイジングのお手伝いすらできる分野だと思うんですね。そういったことも考えて、部外者は入れないというももとの体質はあると思いますが、どこで開いていったらいいのか、どこで突破口を探したらいいのかというところを、少し各先生方から御意見を伺えればと思います。

○上野吉一

堀さん、ありますか。

○堀 秀正

のっけから大変困難な問題を提起されてしまっ。

ある程度、日本の動物園の管理運営のシステムがどうなっているのかを少し説明しないとわからないだろうと思うので、説明しますが。ここの協力団体である日本動物園・水族館協会というのがありますが、この協会のメンバーになっている動物園が国内に60ぐらいありますね。その60ぐらいある動物園のうち8割が、地方公共団体が設置する公の施設というものに該当します。つまり平たく言えば、役所の出先機関なわけですね。そこで

働いてる人たちは役人です。私も役人です、東京都の役人です。鈴木さんも名古屋市の役人という立場。

そうすると、オープンの中で、職務上知り得た秘密を漏らしてはならない守秘義務というものがございます、これが結構制約になってますね、オープンな場で物を語る上で。先ほどの講演の中でしゃべったことの何割かは、もしかしたら、その守秘義務に抵触すると言われちゃうかもしれません。つまり、守秘義務の範囲をどこまで適用するかということについて、あんまり明解な基準がないということが一つありますね。

それと、そういったことで、実際に動物園で働いている飼育係であるとか、あるいは獣医であるとか、動物を直接取り扱う現場の人たちと、それから動物園の管理運営をする市当局との動物園に対する見方、動物園って何だということに対する考え方、これはもう相当差がありますよね。名古屋市長にせよ、東京都知事にせよ、住民の直接選挙で選ばれた代表ですから、市や都の当局の考えは住民の考えの代表であると原理的には言えるわけですから、そういうふうと考えていくと、市の当局が動物園は楽しくなきゃいけないんだと、アミューズメントパークでいいんだ、それこそが市民の求めている動物園の姿であると言え、それは市民がそう思っていることに、一応原理的にはなる。

なので、動物園のありようというのは、その動物園のある自治体の人たちが何よりもまず動物園に関心を持ち、動物園で暮らす動物の生活に関心を持ち、問題意識を持ってくれるということが、多分一つ重要なことになってくるんだろうと思います。

そういう意味合いにおいて、このような会議が催されるということは一つのインパクトになると思いますし、こういうところに我々のような立場の人間が出てきて、ある程度率直に発言するということが意味を持ってくるんだろうと思います。

○上野吉一

一応動物園の管理職というか、そういうレベルにいる人間として言えば、まさに今、堀さんがおっしゃられたように、多くの日本の動物園は公立ですから、市民の声に弱いわけですね。

まず第一の問題は、市民の人たちが動物のそういうありようというものを理解していない、あるいは、どうあればいいのかということをごきちんと考えていない。見て楽しい、ライオンさんを見てきた、ゾウさんを見てきた、楽しかったねと終わってしまう。でも、実はその裏に彼らの生活があるんだということ意識しないで帰ってし

まうわけですね。だから、動物園は本当はその生活もあるんだということを伝えなきゃならないんだけど、同時に見る側もそういう生活というものを、苦しい生活をイメージしろというのはあれなんですけども、そういう彼らも生きてるんだということをきちんと感じるような気持ちを持つということが必要で、それで、そういうものに根差して動物園づくりというものが必要なんだという声を大きくしていくということが、まず一番大切なことだと思うんです。

だから、ファンドレイジングとかという形で予算を市民の方から集めてくれる、それはもちろんありがたいことではあるんですけども、それ以前に、まずは動物園がどういうものなのか、あるいはどういう意味があるのか、あるいは、その中で生活してる動物がどう今あって、どう本来はあるべきなのかということにきちんと声を上げていくという、そういうことにもっと動いていただくことが一番のドライブになるんだと私は思ってます。よろしいでしょうか。

○質問者

今、この質問をさせていただきましたのは、実際問題として若干の浮き沈みはございますけど、少しずつ動物園の来園者数というのが減ってきている現象がございませぬ。問題は、私の周りで聞こえる声は、やっぱり見たくないから行かないという方々もふえていることは確かなんです。

ただ、やはり見たくないから行かないんだけど、行かないということは、例えばディズニーランドだったら、じゃあ、もうこの機械動かすのやめようとスイッチ切ればいいことなんですけれど、動物園は動物のスイッチを切るわけにいかないと。そうすると、お客さんが減ってきて、でも動物という生き物を生かしていくというお金はそのまんま使わざるを得ないという中で、悪循環の中に陥ってしまうと。既に陥ってるのかもしれないけど、そういう危機感があるんです。

ですから、行かないと言っている人たちを説得するために、けんかの体制ではなくて、動物園側でもこういうふうにならな改革をしたいと思ってやってる人がいるんだと、こっちを見てくれというのを、どういうふうな形で広めてさしあげようかというのが私のジレンマなんです。一方では、メディアがやっぱり、何か立ち上がるレッサーパンダばかり追っかけたりとか、そういった傾向が非常に強い中で、どうしたらいいのかなというのが今の私のジレンマなんです。

○上野吉一

それ言うと、最初に私が説明させていただいたように、動物園の役割というのは変わってきていて、単に動物を見せればいい、楽しく見て帰ってくればいいというのではなくて、そこから今の地球の問題だとか環境の問題だとか、そういったものをイメージするきっかけづくりになるような、そういう教育施設にならなきゃいけないわけですね。そういう働きを動物園側は努力して、しっかり、どういうふうなやり方でそういうメッセージを伝えられるようにできるのかという工夫も必要ですし、それは先ほどの鈴木さんがやっておられるような、現場での動物の扱いを通してのメッセージの伝え方もあるだろうし、もう少し大がかりな形への動物園自体として、メッセージを伝える工夫というのものもあるだろうし、いろいろなレベル、やり方というのはあると思うんですけども。いずれにしてもそういったことをやって、やっぱりメディアというのは私も問題だと思ってるんです。

なかなかメディアというのは、本来のそういった動物園の役割というものになかなか注目してくれなくて、おもしろおかしいところばかり注目して、騒ぎ立ててくれる。そうではない形で注目してもらえるように。そのためにも市民の人たちが、市民の人たちに自分たちで勉強しろというのはちょっと暴言かもしれないですけども、やっぱり市民のクオリティーを高めていかないといけない部分もあると思います。

○質問者

この議論に関する発言ですけども、やっぱりキーは科学的なアプローチが必要だということに尽きると言うんです。

動物園の中には、東山動物園のように工夫をして成果を出している動物園もある一方で、動物の福祉を本当に考えてるのかと疑いたくなるような動物園もあります。それは市の公務員だから限界がありますよという話もありますけども、その一方で、実際成果を出してるところもあるので、そういうものを先進事例として横展開していくということが考えられていいんじゃないかと。その話の中で、市の当事者がもっと自覚を持つべきだというようなお話がありました。

また、その市の当事者を選挙で選んでいる一般市民のレベルも上げる必要がありますということですが。現実には、私は最近、機会があつて、前横浜市長の中田さんと話をしたことがあつて、その中で動物福祉の問題についてもちょっと意見を交換してみたいんですけども、基本的にそういう問題意識を持っていません。一般市民はい

ろんなレベルの方いらっしゃいますけども、科学的な事実に基づいて判断はしてないと。ただ単におもしろおかしい、あるいはかわいいという一時的な側面を見て判断しているということであれば、きょうの非常にいい例は、メイソン先生のああいう科学的な実験結果ですよ。例えばこういう状況であればストレスホルモンがふえるからよくないんですよと、こういう施策を実施するとストレスホルモンが減るから、動物の福祉につながりますという話を一般に広く広めることができれば、それをベースに、じゃあそのための施策はこうしましょうという議論ができると思うんですよ。それとのかかわりで、実際に東山動物園みたいな成果を出しているところと、うまく相乗効果を出しつつ、一つの活動にしていけることができれば、何か変化が起こせるんじゃないかと思うんですけど。

だから、端的に私の質問は、科学的な成果が世界じゅうを見渡すと、先進国ではそういうものがありますと。そういうものを何で日本で導入して、単純明快にこういう方向でやっていきたいと思いますと言えないのかというところが非常に大きな疑問なんですけど、いかがですか。

○上野吉一

科学者がどのように動物園とかかわったらいいと思われそうですでしょうか。

○ジョージア・メイソン

動物園で科学的なデータをまとめるというのは、非常に挑戦的なことなんです。それぞれの動物園で、限られた数の動物の中でデータを集めるということとお金がかかってしまうわけですね。もし科学的な基金というものがあれば、そこからお金が出るかもしれませんが、通常は動物園が資金を払わなければいけないわけです。動物園がそのような、動物をストレスに置くようなことにお金を払うかどうかということなんです。ですから、おっしゃったとおりだと思うんですけども、非常に重要だと思うんですよ。もちろんエビデンスに基づかなければいけないわけなんです。そうでないと、無知につながってしまいます。

しかし、客観的に物を見て、動物に対して結果をもたらすためには、やはりデータというのに基づかなければいけないという御意見には賛成です。全体的には、今の御意見には賛成だというのが私の意見です。

○上野吉一

日本の場合は、最近まで大学にいたから大学の立場で

言わせてもらうと、余り動物園の動物を研究対象にするということは、長い歴史の中でなかったんですね。もちろんそれは、今お話にあったように、動物園の動物というのは、サンプル数として実験動物として考えた場合に、十分なサンプル数になかなかそろいづらいという問題があるだとか、それだったらもう野生の動物を調べた方がいいだとか、実験動物としてやるんだったら実験動物として飼われている、コントロールされてる動物を相手にした方がいいという判断を研究者はしがちで、動物園の動物というのは研究者とは関係のない動物という扱いでずっときてしまった。だけど、実際には、野生を知るためにも動物園の動物を理解するということは意味のある部分もあるし、当然、動物園というのは、先ほど言ったようにメッセージを伝えるための施設として現実に存在するわけですから、今おっしゃられたような形で、よりよい、より適切な、科学に根差した形で動物を扱っていくことが価値のある動物園になっていくものである。

そういう意味で、これからは動物園に対して研究者ももっと目を向けていかなければならないだろうということはあるんですけども、なかなか日本の研究者、社会の流れとしては、これからの部分が非常に強いというのがあります。

○質問者

具体的に何か第一歩を、アクションのために踏み出すためには、何が一番。みんな、ここにいる人は、多分、科学的なアプローチが必要だというのは、異論がある人はいないと思うんです。

○上野吉一

ただ、実際に多くの学生やら何やら含めて、動物園を、かつては研究者は動物園を無視してたわけですけども、研究者側としてはですよ。そうではなくて、動物園をフィールドとして研究する若者はふえてますから、そういう人たちが成果を出して、それが動物園フィードバックされていくような、そういうサイクルが出てくれば、先ほどのメイソンさんがやられたような成果が日本でも出て、それが動物園に戻ってくるようになれば、現実に、具体的な例で言えば、鈴木さんや堀さんの場合は、そういう研究者とのつながりということではなかったかもしれないですけども、実際にはサンディエゴの人にエンリッチメントをした方がいいですよという研究者とのコミュニケーションがあって、ジャイアントパンダのエンリッチメントが始まりましたよね。そういうことがぐるぐる回り出せば、よりよい動物園になっていくんでは

ないかと思えますけども。

○質問者

これから日本でも、若い学生が研究者になって、その研究結果が世に出てくるという状況になりますということと、それから既にある先進事例について、情報発信する情報発信源はどこかということになると、結局、研究結果を広く一般市民に知らしめる必要があるわけですね。そうすることによって、現状も客観的に理解することができるし、現状を改善するためには何が必要かというのが見えてくるということになるので、これから出てくる日本の研究成果、それから既にある先進国の海外での先進事例を発信する発信源としては、一般市民団体ということになるんですか。

○上野吉一

研究に関しては、一般市民の人はもちろんよく勉強されて、発信することは問題ないと思えますけれども。なかなか研究そのものについては、一般市民の人たちが自分で勉強して深く理解するということは難しい部分があるわけですね。そういう意味では、研究者という専門家がかみ砕いて説明するという作業が必要だと思えます。そういう意味では、研究者というのは頑張らなきゃいけない。

そういう意味では、例えばこういう研究会を開いたり、あるいは私自身もいろいろな形で市民も含めた研究会というものを、今までも動物園に関する研究会を主催してきましたけども、そういったものを使って、より広く知ってもらおう努力をしていくということだと思えます。

○質問者

例えばゲルフ大学の研究成果なんか、もっと広く日本一般の人に知ってもらいたいと思うんですけど、いい研究がありますと。それを日本の人たちに知らしめる必要があるとは思われませんか。

○上野吉一

いや、ですから今言ったように、それはあると思ってるんです。

だから、あると思ってるので、そういうことを今までも研究会を開いたりとかいろいろの形、あるいは呼んでいただいたりして、講演という形でお話をさせていただいてるとか、そういうことは研究者側もやっています。

○質問者 じゃあ、私が言っているような内容というの

は、もう既に行われていると。

○上野吉一

先ほどから言ってるように、研究者の数が少ないんですね、日本は特に。海外だって動物園をフィールドにする研究者の数は決して多くないと思えますけども、海外に比べてもはるかに日本は少ない。片手で数えるぐらいしか、動物園を主要なフィールドとしてやっている人はいないですね。学生を入れればもうちょっとふえますけども。

だから、そういう小さなポピュレーションでしか現状ではない中でやろうと思うと、まだまだ努力していかなければならないことは多いということです。だから、やってないわけではないです。

○質問者

具体的に改善するためにはどういうアクションが必要かというところが、まだ見えないということですね。時間がかかりますということのお話にしか聞こえないんですけど、そういう理解だという。

○上野吉一

時間はかかります。

○質問者

ある意味、時間に任せるしかないというような、そういう。

○上野吉一

いや、時間に任せるということを単にいつているのではありません。

○質問者

何かせっかくこれだけ人が集まって、共通の認識にあるレベルで立ってるのであれば、そういう動きをきっかけに、何かアクションを起こせばいいと思うんですけど。今のお話だったら、結局そういう流れにあるから、時間がたてば徐々によくなっていくでしょうとしか聞こえないんですけど。

○上野吉一

いや、そういうことを言ってるわけではなくて、時間に任せるんじゃないで、ポピュレーションが小さいというのは事実なわけです。だから、なかなか時間がかかってしまうというのも一方である。でも、それを早めよう

と思うのであれば、それは先ほどの御提案にもあったように、市民の人たちも頑張っていたと、その両方が両輪となって進むことによってより加速されるわけで、研究者だけに頑張れと言われても、なかなか難しい部分が今の段階ではあるということ。

会場係 済みません、ほかの方、たくさんお見えになってますので、ほか、御質問等あれば、せっかくの機会です。

○質問者

ありがとうございます。

○上野吉一

いえいえ、全然気にしないで。

○質問者

私、教育の方にかかわってるので、いつも動物も好きですから、いろんなところ行けば必ず動物園、外国でも行くようにしています。そのときに、一般の市民として気がついたことなんですが、一番最近、オーストラリアのメルボルン動物園へ行きました。そのときに、行って、そこで見ようと思った動物の3割ぐらいしか、本当は自分の見たかった動物は目にすることができなかったんです。日本で同じことが起これば、多分、家族連れの人、見れなかった、何よって不満で帰ると思うんですね。実際にメディアの力とかもありましたけども、メディアでも、こういうものを見に行こう、出なかった、残念ですねとか言って、見ることだけを、こちらが求めている動物の姿を見ることだけが大切であって、そのほかのことは無視するような見方を、一般の視聴者にも伝えたりしていますが。

私はそのときに、残念だったけど、ヒマラヤの何とかだと思うんです。忘れまして、名前を。それは、そこに1時間いたんですが見れなくて、見たのは、茂みの向こうの方で目がちらっと見えたけど、そのときに物すごく感激しました。それでも見えなかったかもしれないんですが、要は私思うんですけど、もしも見るだけが、見せるだけが目的の動物園なら、今の世の中、バーチャルなことが幾らでもできますから、必要なくなると思うんです。でも、私たちに今必要なのは、におい、それから本当に何かそこに自分たちと同じ生き物がいるという、何か生き物としての共有できる興奮ですね。それが持てるというのは、やっぱり動物園に行かないと、わざわざアフリカとかその場所に行かなきゃいけない、それは不可能なことだと思いますから。

そういう意味で、私、一般の者としては、動物園に行けばそこにはこういうにおいがある、いなくても、そこで一つ欲しいのは、専門の動物行動学者かどなたかのガイドの人がいらして、今見えないけども、あの向こうにいるんだよ、耳澄ましてごらん、いびき聞こえるかな、何かそういう説明があれば、もうそれだけで多分私が連れていってる子供とかは興奮して帰ってこれると思うので、何かそういうガイドか何かを動物園に置いて、これまた予算とかになりますけども、そういうものがあったら十分です。

何か一つは、先生もおっしゃったんですけども、動物園側にばかりいろんなものを押しつけるんじゃなくて、我々一般の者たちももっと、動物というのは見て、形だけが動物じゃなくて、本当は私たちと同じ生き物で、こんな大きなものを私たち共有してるものだから、見えない部分をもっともっと私たちは教育を通して知るべきであり、その見えない部分の少しでも動物園に足を運ぶことで、少し学ぶことができたなら。その部分は動物園にしかできない部分ですから、そこをお願いしたいですけど、私たち一般市民に求められてるのは、やはり教育だと思います。もっともっと勉強しなきゃいけないし、メディアに働きかけなきゃいけないのは私たちの方だと思います。

テレビの動物の特別番組のほとんどはひどいです。もっともっと助長して、いろんな気持ちだけ、偏った興味だけを助長しています。もっと教育が必要だと思うので、そこは一般市民として、私たちは責任を感じています。本当におもしろいいろんな提議、ありがとうございます。

○上野吉一

動物に関して説明するという点に関しては、いろんな動物園がガイドというものを、ボランティアの方々の協力を得て進めるような方向で、今の動物園は動いていると思いますね。

もう一つの、動物が見えないのをよしとするかと。大抵の場合、なかなかそれをお客さんが納得してくれないというのがありますが、鈴木さん、そのあたりどう思うふうに思いますか、実際に現場としては。

○鈴木哲哉

現場のやってる人間としては、見えなくなる部分というのは、あると助かるかなというのは確かにありますけども。でも、動物園で動物を飼う理由という一つに、やっぱりその動物のことを伝えるというのがありますので、

動物のゾウであったりタンチョウであったり、その動物の魅力を伝えるというのはあります。だから、そういった意味では、見えなくなってしまうというのはどうかなのというところはあるし、日本人の価値観で言うと、見えなくなっちゃうということを受け入れてくれるかなと思うと、なかなか受け入れてくれないのかなって思います。だから、できるだけ見える範囲内でできることをやれたらなと私は思っていますが、答えになってますか。

あと、専門的に解説員とかいうのもありますけども、動物行動学者というような人の話を聞いてもきっとおもしろいと思いますけど、現場の人間の我々キーパーみたいな人間の話を聞くとときが多分一番おもしろいと思います。子供も多分喜んでくれると思いますので、ぜひ現場の人間をつかまえて、こういう話を聞かせてくれたとか、そういう話をどんどん積極的にしていただければ、多分、現場の人間はしゃべりたい人間が多いので、嫌だという人間はあんまりいないと思いますので、ぜひ積極的に現場のそういった働いている人間をつかまえて、活用していただけるといいかなと思います。

○上野吉一

動物が見えないということについては、どう思われますか。

○ジョージア・メイソン

私がコメントするのは非常に難しいんですけども、動物が見られたくないと思っているときには、それを尊重するべきだと思うんですね。もちろん見られたいと思ってるんだったら、それはすばらしいことで、そのために動物園に行くわけです。ただ、見られたくないと思ってるんだったら、やっぱり強制はしてはいけないと思うんですね。

ですから、一般大衆に対しても、今、動物にもプライバシーがあるのでごめんなさいねと言わなければいけないと思うんですね。種によって非常にセンシティブなものもあれば、見られても平気なものもあるので、それを考慮するということが重要であると思います。

物が働きたくないと、動物が昼寝をしたいと言うんだったら、それを尊重するべきですね。

○質問者

私が求めていたお答えは、まさにくださったと思うんです。やはり先ほどの申し上げたときにちょっと言い忘れたんですけども、共有するという中で、私たちは学ぶのは、眠ってる動物を見たりして、動物さんも疲れてる

んだ、今お寝んねしてるんだ、動物も見ただけじゃなくって、やっぱり私たちと一緒に生き物だということから学ぶのは、やっぱり尊敬であり、ウエルフェア、福祉ですか、そしてエンパシーですね、日本語で。エンパシーという同情、そういう言葉。そういうことを学ぶ場になると思います。そういう意味で、動物園はいろんなことを教えてくださると思います。頑張ってください。よろしくお願いします。

○上野吉一

それじゃあ、ほかに何か質問、コメントあればどうぞ。

○質問者

貴重なお話、ありがとうございます。大阪府立大学の学生なんですけれども。

うちの大学にも動物園にすごい関心を持っている人とかがあんまりいないんですけど、ごくわずかながらいて、いろいろしたいなとか思ってる子も結構いるんですけども。実際としては何か大学内だけでの勉強会とか、たまに講演会に行くぐらいで活動がおさまってしまっているのが現状なんですけれど。動物園側からして、結構、動物園に関して熱い思いを持つてる学生とかを使っているじゃないですけども、一緒に何かやっていたいかなことではないのでしょうか。もし何か動物園側が、これこれこういうことを求めているということがあれば、学生側としても動きやすいというか、それに関してやっていきやすいんですけども、何かあれば教えてもらえれば幸いです。

○上野吉一

堀さん、何かありますか。

○堀 秀正

例えば、私が個人として、そういう思いを持って学生を受け入れようと思っても、さまざまな制約が組織的にあって、非常に難しい。そこで残念だけど諦めてしまうことが多い。そういう制度的な制約というのは、皆さんが想像している以上に煩わしいものなんです。

それから、先ほどから話題になっていることの中で福祉ということがありましたけど、ウエルフェアという概念が、もともと日本の社会に歴史的になかったんだろうと私は思ってるんですね。「愛護」というのはあるけれど、これはヨーロッパにはなかった概念ではないかと思うんです。「虐待防止」というのはあるけれど、「愛護」というのは西欧にはない概念だと思います。日本では、

ちょっと前まで犬畜生という言い方があったんですね。これ、ちょっと英語に訳すの難しいとは思いますが。動物を人間よりも低く見て、そして動物なんだからこの程度でいいと。例えば動物にえさを「あげる」という表現をすると、今でも年配層は怒るんですよ。動物にはえさを「あげる」もんじゃない、「やる」もんだと怒るんですね。そういった文化的な土壌とか、それから社会心理学的な状況とかそういったものが、生きている動物と対峙するという関係性の中でかなり複雑に絡んでいるので、単純に、どうしてサイエンティフィック（科学的）な管理ができないのかと言われても、なかなか明快に答えられないという感じを持っています。

○上野吉一

よろしいですか。ほかに、時間を過ぎてますけど、まだもうちょっといいということなので、質問があれば。

○質問者

日本獣医生命科学大学3年の学生です。

学生の身分で質問するのは恐れ多いんですけど、先ほど堀先生がおっしゃったことで、実際に動物園側に学生を呼んで何かをしようと思ったことは、実際にあるようなことをおっしゃられてたんですけど、具体的にどのようなことをやってみようかなとか思われたのかなというのが質問なんですけど。

○堀 秀正

私は上野動物園に勤める前に、結構長く水族館にいたんです。7年ほどいたんですね。そのときに、大学の学生さんが卒業論文の研究を動物園でしたいと。当時、私、ペンギンの飼育を担当していたんですけども、それでペンギンの音声による情報伝達、ボイカルコミュニケーションの研究をやったらどうかという話をして、そのときにはその学生さんの指導教官と意見交換をして、こういうテーマで3年間で学生3人使って、こういう研究をしましょうみたいな話をして、学生を受け入れたということはありましたね。それは大学の先生側も、水族館と一緒にそういうことをやるということを、まずは研究教育上、価値あるものと認識してくれたからそれが実現したので、まず第一に、先ほどから話がありましたけど、飼育下の動物が生物学の研究対象として適切でないとか魅力的でないとかという考え方もありますから、相手方の問題もありますよね。

一方で東京の動物園は、東京都の建設局公園緑地部というところに所属してるので、動物園の管理運営という

のは、公園緑地行政の一環なんですね。それは教育でもなければ研究でもない。だから、そのための予算や人員は配置されていないし、研究とか教育というのはそもそも動物園の仕事ではないだろうという論理があるわけです。なので、基本的には、そういう学生さんを手放しで歓迎するという体制にはなっていない。これがさっき言った制約ということで、本来の業務に支障がない範囲ならば、受け入れても差し支えない、ということなんです。大学などと共同で教育や研究を積極的にやっていくというのは、なかなか難しい面があります。

○上野吉一

じゃあ、もう一つぐらい何か質問があれば。

○質問者

ペットアカデミーで教職員しております。

今回、エンリッチメントのいろんなお話を聞かせていただいて、非常に積極的に取り組んでらっしゃるなと思ったんですけども、やはり動物園によって地域差というか、温度差がたくさんあると思うんですね。片や取り組んでるところもあれば、全然取り組んでないところもあると思うんですけども。

最初の方で、上野動物園さんがパンダのことを、常同行動されているので改善したらいいんじゃないかということがあったように、日本の動物園でも、自分の動物園だけではなくて横の動物園、近隣の動物園とかほかの動物園に伝えるために、何かこういったアプローチが必要なんじゃないかですとか、もう既に行っているようであれば、どんなことを行ってるかというのがあれば教えていただきたいなと思っております。

○上野吉一

具体的にエンリッチメントが、どういうことがあるかということですか。

○質問者

どのように伝えているとか、どのような活動をしているのか。

○上野吉一

それは、先ほどの鈴木さんにもあったように、それぞれ専門の、例えばゾウ専門の飼育員が集まって、いろいろ意見交換するような場があったりしますから、そういうものを使って意見のやりとりはあると思います。

ただ、そういうふうにしたからといって、まさに先

ほどのお話にもあったように、個人として興味がある、やってみたいということと、動物園としてそれを受け入れてやれるかどうかというのは、また別の問題なんですね。だから、ある動物園でうまくいってるから、じゃあ試しにやってみようかということがどんどん広がっていくのが容易にできるかという、なかなか実際にはそうはいかないというのが現状だということです。どうぞ。

○質問者

メイソン教授の国の動物園は私立ですか、それとも公立ですか。

○ジョージア・メイソン

イギリス人であって、カナダに住んでおりますので、母国は二つあると言えましょう。

イギリスでは、動物園というのはいろいろな形態がありますね。民間のものもありますし、中には市が運営しているものもあります。カナダの状態はよくわかっておりませんので、申し上げることができません。

でも、大半の動物園は民間だというふうに考えております。

○質問者

ということは、だからこそ、違いが2国であるというふうに思うんですか。つまり日本との違いであります。

○ジョージア・メイソン

そうですね、正直言ってわかりません。非常に複雑な質問でありますので、よくわかりません。いかにして動物を受け入れるか、そして、なぜ動物園に行くのか、非常に深い質問ですよ。これは文化の違いかなというふうにも思います。

○質問者

それほどシンプルではないということですね。わかりました。

○上野吉一

これだけは聞いておきたいがあれば、最後に一つだけ。よろしいですか。じゃあ、後ろの人。申しわけないですけど、手短かにお願いします。

○質問者

帝京科学大学3年です。講演ありがとうございました。最後に、つまり何か大きくなっちゃうんですけど、国を変えればどうにかなるかもしれないということですか

ね。思ったんですけど、そうですね。

○上野吉一

国を変えると言うよりも文化の違いもあるので、だから、そういう文化的な背景まで変えられるんだったら、それはそうなんでしょうけど。そんなことはあり得ないので、そういう物の見方ではなくて、今ある自分たちが持っている価値観の中で、改めるものは改める、あるいは科学というものはある意味、客観的に物を見る一つの重要な視点を与えてくれます。それをどう受け入れるかは、文化的な問題、価値観の問題が出てくるけれども、科学的な物の見方というのが、そういうものとは別の形でとらえるわけですよ。だから、科学というのは客観的だと言える。

だから、そういう形で、動物を私たちはどう理解していくのか。それに対する責任はどうあるのかということ、市民として、あるいは人間として、どうとらえるかということ、きちんとしていくような文化になっていけばいいんじゃないかなと、私は一応、動物福祉、あるいは生命倫理というものを大学にいたときに研究してきた立場としては、そういうふうに思います。

じゃあ、まだいろいろ聞きたいことがあるかもしれませんが、もし何かあれば、あとは個人的にお願いします。

今日のワークショップはここまでにしたいと思います。どうもありがとうございました。

